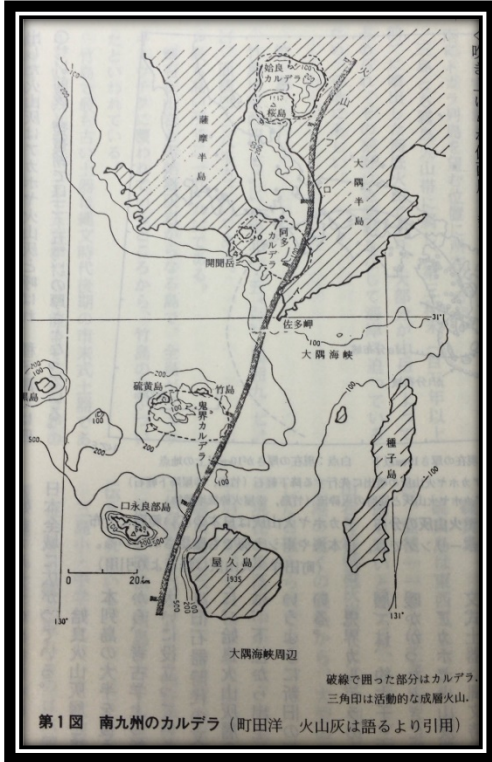


硫黄島について考察

1116840041 付莎莎

序論

三島村は鹿児島県本土薩摩半島の南端より約三十海里の沖合の太平洋上に東西に並んで浮ぶ竹島、硫黄島、黒島の三つ島よりなっており、戦前は現在の十島村と同じの村であったが、終戦直後北緯三十度線を境に南と北に分断され、爾来六年間は別々の行政下におかれていたのであるが、昭和二十七年二月十島村の本土復帰と時を同じくして分村し三島村として新発足し現在に至っている。したがって三島村としての歴史は比較的浅いわけである。



竹島と硫黄島の南端に、世界的に見ても規模が大きい鬼界カルデラがある。鬼界カルデラの中央火口丘の北端の平家城の南側から矢筈岳(313メートル)の南東または東に面する崖がカルデラ壁にあたる。(図1) 硫黄島と稲村岳はカルデラの内側に噴出した後カルデラ火山である。稲村岳は海拔 236 メートルあり、お椀伏せた様な形をしている。最高峰の硫黄岳は海拔 703.7 メートルあり、いつも噴煙をあげている。かつては硫黄も採掘していたが現在は硅石だけである。硫黄岳と稲村岳の間や両火山とカルデラ壁

の間の低地は硫黄岳から流出した再堆積物でおおわれている。集落はカルデラ壁と稲村岳の間の低地にあり、長浜港は西側を永良部崎で限られた港で赤茶けた色をしている。

図1

位置 (図2)

測量地点	東経	北緯	鹿児島港までの距離	本土への最短距離
硫黄岳	130度18分27秒	30度47分22秒	108km (硫黄島港)	37km (佐多岬)

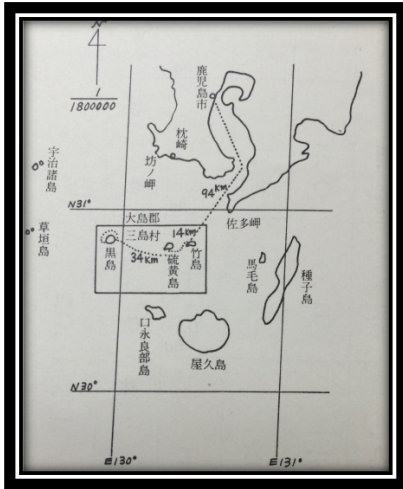


図 2

面積

島名	周囲	面積
硫黄島	14.5km	11.78km ² (11787ha)

人口：

江戸時代の人口

寛保 2	天保 4	安政 6
人口 380 人中痘瘡で 200 人死亡	人口 200 人中腸チフスで 40 人死亡	人口 270 人中コレラで 30 人死亡

——長濱系図、拾島状況録

明治時代の人口

	明治 4	明治 18	明治 28 年
世帯数	52 戸	68 戸	84 戸
人口	253 人	312 人	544 人
男	130 人	154 人	276 人
女	123 人	158 人	268 人

——薩隅日地理纂考、島嶼見聞録、拾島状況録

本論

2016 年 7 月 2 日に私たちは鹿児島島からフェリーで硫黄島に行った。

順番に恋人岬、ゴミ場、希望の鐘、俊寛堂、東温泉、安徳天皇陵、三島小学校・中学校、硫黄島港、俊寛歌舞伎上演記念碑などに行った。

島の歴史

硫黄島にいつごろからから住民がいたという問題は、頗る興味あることだけれど、今にわかには知る由もない。あるいは説をなす者、欽明天皇 1200-1231 年の頃、始めて人が住むようになったというのであるが、的確な記録があるわけではない。しかし遣唐使軽大臣、参議春衡父子が帰朝の途この島に漂着し、1316 年斉明天皇 2 年、父軽大臣は遂にこの島で客死したので、春衡はその頭髪を持って帰洛したのであるから、当時この島に若干の住民がいたであろうことは想像出来ると思う。爾来 500 余年、本島の歴史は杳としてわからないが、治承元年（1837 年高倉天皇 9 年）、丹波少将藤原成経、平康頼、俊寛僧都達が、平清盛のために遠島せられた当時は、既に相当の人口があったことは事実であろう。それから数年後の弘化 2 年（1845）には、壇ノ浦で亡びた平家の一族が安徳天皇を奉じて此の島に着いたことが、島の記録にある。人々は直に黒木の御所を造営して天皇の入御を乞い、諸将は要害の地に城を築いて、源氏の追手に備えた。

地形及び地質

東西に長く、南北に狭い、周囲三里三十一丁、東方に本島第一の高山で而も活火山たる硫黄岳が屹立し、海拔 2322 尺、噴火口は既によほど埋っているが、付近の弱点至る所から常に硫気を噴出し、噴煙は遠くから望見せられる。島に中央部に南面して、東は磯松崎溶岩流の松林に境せられ、西は永良部崎（ハリマ崎）溶岩流の断崖絶壁、蜒々たる大屏風の如き半島に境され、そこに新月形の港湾を擁するのがすなわち本島唯一の部落たる硫黄島港で、砂浜に続いて部落が発達している本島の周囲はことごとく断崖絶壁をなし、上陸可能の場所は、部落の海砂を除いてはすなわち十二カ所に過ぎないが、それでも岩礫磊々たる所で、決して安心して上陸出来る所ではない。地質は全島ことごとく安山岩であり、土地は全く火山噴出物を以て蔽はれ、農耕地の土質は比較的膨軟で、地味は一般に肥沃とはいわれぬとしても、相当なものと思う。

現在の集落の中からは、弥生時代中期の土器も出土しているが、それほど多くない。硫黄島の三島小・中学校及び岩切浅芳氏所蔵の一字一石経がある。三島学校の横から道を硫黄岳に向かって 500 メートルほど行くと、こんもり茂った椿山の中に徳躰神社がある。石小倉の中に一個の自然石を置いて神体としてあるが、この祭神は不運の遣唐使軽野大臣となっている。

硫黄島に初めて私塾が建てられたのは明治 17 年（1884）で、島の太夫、長濱衛守が、島民の無学をなげき、自宅へ 7 歳から 13 歳までの子供を集めて手習いの子供は、毎朝早く起きて師匠の家に行き、庭掃除をし手洗いの鉢の水をかえ、師匠の下駄までそろえて待っていると、やがて師匠が起き、咳払いをしながら雨戸、障子を開けるので、皆その前を出て「お早うございます」と挨拶をした。師匠が洗顔に出ると、皆は床を片付け室の掃除をすませ、手習いの用意をして待っていた。

戦後、熊沢天皇の出現と同時に硫黄島の安徳天皇の子孫という長浜天皇のことがジャーナリズムによって騒がれたことがある。

厳密に言うと林産製造であるが、便宜上此所に記述する。山からカタシの実（ヤマツバキの果実）を採って帰り、日に乾して自然に割れて種子が出るのを待つ。種子は集めて蓆に広げて乾す。それを蒸してから搗く。搗き砕いたのをシュロ皮で包み、桶の中に入れて、上から重石を下げた攪る。

硫黄島は十島村の中でも最も祭事の多い島のように思われる。そしてお祭りと言えば大抵舞踊が伴って、社前に於いてこれを神を奉納する風がある。

結論

硫黄島は、きれいな海、豊富な魚類、火山、温泉、海岸と美しい自然環境に恵まれているので、この特性を生かして観光開発事業を進めている。この自然環境に、村内の文化財を加えことにより、本島における離島観光はさらに有望される。

今回の旅は確かに素晴らしかったが、以下は私が感じた島での不満な点：

- ①レンタカーがない、交通不便。
- ②修繕されていない道路がある。
- ③食の問題。島民はインターネットで注文して、船で注文したものを運送しなければならない。
- ④ゴミ出しの問題。島民は、ゴミを島から鹿児島市まで運んで捨てなければならない。
- ⑤お土産の種類が少なく、売っている店が一つしかない。食べ物のお土産がない。
- ⑥船便が少ない。

観光レクリエーションの形態は、従来の遠距離・金銭消費型から近距離・時間消費型へ移行し、さらには、年齢、階層別に個性化、多様化する傾向にあるので、これらの変化に応じた観光資源の開発や施設の整備が必要と思う。また、観光地は、それぞれ観光資源の特性を有しているが、単に、吸引力に乏しい面もあるので、観光資源を広域的に結ぶ観光ルートの整備等が必要と思う。

対策：

- ①観光施設の整備についても段階的に促進する。硫黄島東温泉を中心にして施設整備を段階的に進める。道路改良、温泉整備。
- ②観光土産品制作促進する。
- ③展望台、休憩室などの整備
- ④観光客の都合では臨時配船も考慮する。
- ⑤宿泊施設の増設

自然と人間の総合的な調和を目指し、滞在型観光を基本として、のびのびと心ゆくまで「無垢の自然が息づく島」で遊舞台を創造する。

参考文献：

- 1、『三島村誌』（三島村誌編纂委員会/編纂） 三島村 1990
- 2、『三島村秘史』松永 守道/著
- 3、『鹿児島ふるさとの昔話』 下野 敏見/著
- 4、『島の歳月』（鹿児島県三島村黒島） 日高 重行/著
- 5、『南日本の民俗文化誌1』 下野 敏見/著 （南方新社）
- 6、<http://wikitravel.org/ja/>
- 7、https://gbank.gsj.jp/volcano/Act_Vol/satsumaioujima/vr/doc/056.html